

氏名（本籍地）	寅野 遼（埼玉県）		
学位の種類	博士（文学）		
報告・学位記番号	甲第476号（甲（文）第57号）		
学位記授与の日付	2020年9月25日		
学位記授与の要件	本学学位規程第3条第1項該当		
学位論文題目	トマス・ホップズにおける神と自然		
論文審査委員	主査	教授	博士（文学） 三重野 清顕
	副査	教授	博士（学術） 河本 英夫
	副査	准教授	博士（文学） 松浦 和也
	副査	明治大学講師	博士（学術） 坂本 邦暢

## 審査報告

### 2020年度審査学位論文「トマス・ホッブズにおける神と自然」(東洋大学大学院文学研究科哲学専攻博士後期課程 4110150002 寅野遼)

本論文は、「神は物体である」という主張に注目しつつ、17世紀イングランドの哲学者トマス・ホッブズにおける神と自然の問題を扱うものである。本論文は、従来の主導的なホッブズ研究とは、研究スタイルにおいて大きな隔たりがあるように見える。これまで、ホッブズは主に政治哲学的な文脈において検討が行われ、社会契約論的な社会理解や共同体における道徳的秩序や規範の生成と言った諸問題が主要な論点であったと言える。また、20世紀後半においては、ホッブズの思想を当時のさまざまな思想史的布置関係に則して理解する研究も登場している。本研究は、ホッブズのテキストのうちに現代的な政治哲学の問題意識を読み込む、あるいは当時広く共有されていた思考の枠組みのうちにホッブズを完全に解消してしまうといった事態を避け、できるかぎりホッブズ自身の叙述に即した形で、ホッブズの思考の展開を内在的に理解しようという解釈方針に基づくものである。

その上で、本研究において主題化されるのは、ホッブズにおける神と自然の問題である。「神と自然」という主題は、いずれも従来のホッブズ研究において必ずしも重視されてきたとは言えない。「神」というテーマについては、ホッブズは当時しばしば「無神論者」とみなされ、また後世にはその思想の世俗性が積極的に評価される傾向にあったからである。また、ホッブズの自然哲学は、従来の研究においても政治哲学の基礎的部分として言及されることはあったが、肝腎の自然哲学と政治哲学の関係について十分に解明されてきたとは言えない。しかし、ホッブズ自身のテキストを詳細に検討するならば、ホッブズの政治哲学を完全に世俗的な観点から理解することができないことがわかるし、また自然哲学と政治哲学の関係についても改めて検討し明確に規定しなおす必要が生じてくる。本論文は、ホッブズの根本的な問題意識をあぶり出し、ホッブズがどのようにこの問題意識に向かい合ったかを追ってゆくなれば、神と自然という主題が必然的にホッブズ思想の中心に位置づけられるべきものであることを示している。

本論文は全6章から成っており、主要な内容はおおよそ以下の通りである。

第1章では、ホッブズのスコラ学に対する態度が検討される。ホッブズによれば、スコラ学は思想的には聖書とギリシアの混合物であり、また社会的には教会の権力を維持するための装置として機能する。スコラ学は言語操作に基づき民衆を欺くための学説を作りだし、その結果政治的混乱や戦争を生じることになる。ホッブズが政治権力の基礎に自然哲学を置く背景には、このような根本的な問題意識がある。

第2章は、ホッブズの政治哲学上の主著『リヴァイアサン』と自然哲学上の主著『物体論』における「神の模倣」というモチーフを検討するものであり、そのことでホッブズ哲

学の基本的な発想法が明らかにされる。世俗的な観点から従来ホッブズ研究においては人間における主体的な制作が強調されてきたのであるが、本論文は人間の制作における神の創造の模倣という契機に着目するのである。政治哲学の領域においては、人間が秩序ある国家を作り出すことは、混沌から秩序ある世界を作り出す神の創造と類比的に理解できる。他方で自然哲学の領域において、自然認識という営みもまた、「推論」という、神を模倣する一種の行為として理解されることになる。このように、政治哲学と自然哲学のいずれの領域においても、人間の制作を神の模倣として理解しようとする共通のモチーフが存在するのであるが、しかし、これら二つの領域には以下の差異が存する。政治哲学においては人間が神を完全に模倣し、「原因から結果へ」進む仕方で制作を行うことができる。それに対して自然哲学においては、人間は神がどのような意志や意図に基づいて自然を作ったのか理解できないため、人間は自然については所与の「結果から原因へ」進む推論しか持ち得ず、その結果獲得されるのは蓋然的な知にとどまる。こうして、ホッブズは「神の模倣」というモチーフに基づいて、人間にとって理解可能なものと理解不可能なものを峻別しているとされる。

第3章は、デカルトの『省察』をめぐるホッブズとデカルトの論争を扱うものである。ホッブズによれば、デカルトは物的な作用と物的な実体もしくは基体については適切に区別している。にもかかわらず、デカルトは思惟という作用が成立するためには思惟という基体が存在しなければならないことを言語使用に基づいて主張している点で、デカルトがスコラ学者と同様に言葉の混乱に陥ってしまっているとホッブズは批判する。ホッブズの主張によれば、「思惟」という作用が成立するための基体としては、それ自体で存立する実体としての「物体」以外にありえないことになる。この論争はしばしばホッブズのデカルトに対する無理解を示すものと評価されるが、ここではホッブズの立場を示す一貫した議論として積極的に読み直される。ホッブズは「思惟」や「観念」をめぐるデカルトの主張をほとんど退け、神を実体としての物体として考察する道を示しているとされる。

第4章は、ホッブズにおける言葉と真理の問題について扱い、ホッブズの唯名論的立場の検討を行っている。ホッブズは真理を規定して、言葉の属性であるとしている。しかしそうだとすれば、自然についての知識も事物に基礎づけられるのではなく、恣意的な取り決めに基づくものだということになりかねない。それに対してホッブズによれば、人間の推論の基礎となる名辞について、人間が恣意的に作ることができるばかりではなくて、物体の偶有性によっても決定されるものである。この偶有性は、ただ人間によって定義されたものではなく、物体がなければ生じえないものである。このようにして人間の知識と推論は、外部の物体との繋がりを持っていることが明らかにされる。

第5章は、幾何学と自然学における「無限小」の問題を扱うものである。従来の研究においては、ホッブズの「幾何学」と「自然学」は必ずしも連続したものとして研究されてこなかった。本論文においては、この二つの学問領域はどちらも「無限小」に関する思索をその核心に置いている点において連続的であるとされる。ホッブズは伝統的な幾何学に

従うことを明言しているが、その一方で幾何学上の点が無限に分割可能であるという一見奇妙に見える主張を行っている。このような「点の無限分割可能性」から、無限小の運動としての「コナトゥス」という独自の概念が導かれることになる。また、ホッブズは自然学においては、物体が存在しない場所としての「空虚」および分割不可能な最小の固体としての「原子」から成る世界観を批判し、空間を満たす様々な度合いの「流体」に基づく自然観を提示する。さらに本論文は、このようなホッブズの自然観をホッブズの神概念と関係づけて理解しようとする。ホッブズによる空虚の否定は、たしかに原子論への対抗という文脈においても理解できるものであるが、本論文の議論をつうじて、幾何学の領域における「無限分割可能性」、そして「神の居場所」という問題意識に基づくものと理解できることになるのである。

第6章では、これまでの各章での考察を踏まえて、ホッブズの神概念について総括的な議論と考察が加えられている。従来の研究においては、同時代のホッブズ観に基づいて、ホッブズはしばしば無神論者とみなされてきた。このような評価の背後には、非物体的実体を否定するホッブズの唯物論的哲学があるが、ホッブズ自身は「神は物体である」という主張と彼自身が無神論者ではないことが両立しうるものと考えていた。本論文はホッブズの「物的な神」という神理解がどのように世界の存在と両立しうるのかを検討を加えている。「神がどのようにして世界に対して働きかけるのか」という問題をめぐって本論文が重視しているのが、「川の水と鉱水の混合」というホッブズの提示する例である。二種類の流体の混合と同様に、極めて微細な霊としての物体である神も世界と混合しながらも作用を与えるものとされる。以上のように、ホッブズの物的な神は世界と両立しうることが示される。

本論文の成果はまず、社会契約論をはじめとする政治哲学的主題とは独立に、ホッブズの哲学が極めて豊かな内容と統一的な世界観を展開したことを説得的に提示した点に認めることができるであろう。とりわけ『リヴァイアサン』をはじめとする政治哲学的著作において、神という主題を中心に置くことで新たな読解の視点を導入している。また、『物体論』をはじめとする自然哲学上の著作についても、政治哲学との関連性を示したうえで、これまで十分に読解が進められているとはいえない諸領域についても一定の読解を提示することができるものと認められる。その一方で、古代以来の思想史的背景や、同時代のさまざまな思想的潮流との影響関係等、より詳細に検討されるべき課題もまだまだ多く残されているともいわざるを得ない。本稿の提示したホッブズ像にもとづいて、政治哲学領域におけるホッブズの再読がどのように可能なのかという点についても、今後の課題として残されている。

以上の点を総合的に判断するに、意欲的な問題設定でありながら論旨は明確であり、また文献の読解についてもしっかりとしていることが高く評価できる。また、文学研究科（哲学専攻）の博士学位審査基準に照らしても妥当な研究内容であると認められる。

本審査委員会は、寅野遼氏の博士学位請求論文について、所定の試験結果と上述の論文

審査結果に基づき、全員一致をもって本学博士学位を授与するに相応しいものと判断した。